呉錦堂を語る会通信

NO.13　May.　2014

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日　2014.5.15

呉錦堂の故郷慈渓 その３　章炳麟（へいりん）撰 呉錦堂旧墓表発見記

当「通信」第10号で、呉錦堂墓の新旧二つの墓表を取り上げましたが、この第13号では、章炳麟の撰になる旧墓表の顛末に言及した齋藤晋氏の文章を掲載いたしました。なお、この文章は、2000年、氏の二度目の慈渓訪問の後に書かれたものです。（編集委員 橘雄三）

呉錦堂（作鏌）の墓碑

呉錦堂を語る会会員　斎藤　晋

（前略）呉錦堂墓の現在の墓表は、84年に慈渓市政府によって新たに作られたものである。《慈渓文史》記載によると、本来の墓表は章炳麟（太炎）の篆書による七百余字の碑文であるが、文革中に破壊されてしまった。

しかし、改革開放政策の浸透にともない、華僑の功績が見直され、呉錦堂の業績も改めて評価される時代が訪れた。そして、84年、慈渓師範学校が「錦堂師範学校」と本来の校名に復帰し、盛大な祝賀記念行事を行ない、文革中に破壊された呉錦堂墓も修復された。呉錦堂の名誉は完全に回復されたわけである。1984年11月9日神戸新聞にも大きく報道されている。

それでは、章太炎撰写の碑文はどうなったのか？そのことを確かめるために、今回（2000年）、私は慈渓を再訪した。幸い、慈渓市政府戴南樟氏の紹介で、慈渓市僑務辦公室正副主任戚堯乾・嚴堯仙、錦堂師範元副校長周乃復、鳴鶴鎮鎮長方向明各氏のご協力を得て、章太炎（炳麟）撰の碑文が確かに存在することを確認した。（中略）

墓荘横の納屋と管理人

周乃復氏は、“墓表は墓荘のどこかにあるはず”と言ったが、どこにあるのか誰もはっきり言えない。それは、墓荘の左横の大きな納屋の中に、いろいろな雑物とともに横たわっていた。まさかこんなところに…と私は意外だったが、上記の四氏も、「この碑文のあるべき姿ではない」と強く感じたに違いない。いずれ、時機を見て、この碑にふさわしい措置がとられると思う。今回訪問の最大の成果はこのことだろうと感じた。管理人に洗い清めてもらい、まだ濡れている状態のままカメラに収めた。

墓荘横の納屋で見つかった旧墓表

碑文は左右両端が欠けている。各行、縦に14字の小篆、31行残っている（31行で147cm）。

《慈渓文史》記載のとおり、全文七百字なら50行あったことになる。この碑は、洗濯板として使われていたのを見つけて回収したそうである。中国の洗濯風景を知っている人は、この碑が洗濯板として使われている様子を頭に思い浮かべることができるでしょう。左右の欠損部分は、今に至るも発見されていない。

神戸孫中山記念館が章太炎撰写の碑文に関心を寄せていることを知って、慈渓市僑辦は拓本をとり表装して、4月21日の開館までに贈呈したいと言った。しかし、時間の関係で表装は間に合わないので、私は拓本だけを預かって来た。（後略）

大人物小故事（4）

我的外公吴锦堂　　曹愛徳著

当「通信」では、第９号で、曹愛徳著『大人物小故事　我的外公呉錦堂』を取り上げて以来、第10号、第12号で、それぞれ一話ずつ掲載いたしました。本号では、『大人物小故事(４)、(５)、(６)』として、合計三つの話を載せました。お楽しみください。なお、日本語訳は、(４)、(５)、(６)共に編集委員が担当いたしました。ご叱正ねがいます。（編集委員　橘雄三）

一支烟

多年以前，有一天我外公在田里劳动，他要把结实的泥土从田里挖松，来来回回几个小时后，我外公累得汗流满面，心里闷得发慌。此时我外公想，要有一支烟来松一口气该多好啊，可是他身无分文。也不知道从哪来的勇气，他竟会奔到附近的小店想去欠一包烟，但是给店主一口回绝，于是我外公就长长地叹了一口气，心想：我为什么这么穷？正巧这一幕给旁边来买香烟的衣冠楚楚的男子看在眼里，那人很快地向我外公递上了一支烟，并问外公：“你会做什么？”外公说：“我识字不多，又没有手艺，但不怕苦，不怕累什么都愿做。”那人就说：“那好，明天你就在这儿等我。”第二天，外公吃过早饭，早早地来到这里，可是左等右等，不见那人影。店主就说了：“人家是与你开玩笑的，别等了。”快到中午了，过路的熟人见到了外公，又称他的小名说：“‘作镆’，快要吃午饭了，你回家吧！”但是外公心理只有一个信念：“等”。

正当外公又饿又累的时候，有人在他的背上拍了一下，外公回头一看，就是那位好心人。此人见外公坚守信用，诚实可靠，二话没说，就答应介绍外公到上海一家杂货店当学徒，从此外公就离开了农村，开始了学徒的生涯。

年轻时留影

一本の煙草

ずっと以前、ある日、私の祖父は野良仕事をしていました。固くしまった土を掘りほぐし、何時間も行ったり来たりし、疲れて顔中、汗が流れ、暑くてたまりませんでした。このとき祖父は、もし、一服するとどんなにほっとするだろうと思いましたが、懐には、一文のお金もありませんでした。どこからそんな勇気が出てきたのか、なんと祖父は、付近の店屋に駆け込み、煙草を一箱、付けでほしいといいました。しかし、店主に、即座に断られ、祖父は長いため息をつき、心の中で、私はどうしてこんなに貧乏なのだろうとつぶやきました。ちょうどこの場面を、そばで、煙草を買いに来ていた、きちんとした身なりの男がじっと見ていて、すばやく、一本の煙草を手渡し、祖父に、“あなたはなにができますか”と尋ねました。祖父は、“字は少ししか読めません。身につけた技能もありません。でも、苦を恐れません。疲れも恐くありません。どんな仕事でもしたい。”と答えました。その人は、“いいでしょう。明日、ここで私を待っていなさい。”と言いました。次の日、祖父は、朝食をすませると、早々にそこへ行きました。しかし、長い時間、待ちましたが、その人は現れません。店の主人は、“あの人はあなたに冗談を言ったのです。お帰りなさい。”と言いました。もうすぐ正午で、通りがかりの顔なじみが祖父を見て、“‘作鏌’、もうすぐ昼食時間だ、帰ろうよ”と幼名で呼びかけました。しかし、祖父の頭には、“待つ”という考えしかありませんでした。ちょうど、祖父が、お腹がすき、疲れてきたとき、祖父の背を軽くたたく人がありました。祖父が振り向くと、あの善い人でした。この人は、祖父が信頼できる誠実な人物だとわかり、二の句は言わず、祖父を、上海のある雑貨店の見習いに紹介することを承知しました。この時から、祖父は農村を離れ、店員の生活がはじまりました。

大人物小故事（５）

我的外公吴锦堂　曹愛徳著

ここでは、「当学徒（店員見習いになる）」を載せました。お楽しみください。（編集委員 橘雄三）

当学徒

旧社会当学徒是相当的苦啊，什么累活，脏活都要干，真如“当牛做马”，老板一不顺眼还要挨骂挨打。如吃不了这个苦，受不住这个气，几天就可能被撵走。

由于外公在农村受尽艰难人生的折磨，因此，他到上海城隍庙萃丰香烛店帮佣能坚持起早摸黑，从不偷懒。这家店有十多个人，他的差使是当“饭司务”，上市买菜，下灶烧饭，样样精通，勤快利索，账目清楚，所以很快就搏得老板的赞许，一年后就成为正式的店员。但他并不满足，外公安静自己的心，拜账房先生为师，一有空就向他请教，努力学习文化。上海滩是一个花花世界，到了晚上灯红酒绿，一片繁华喧嚷，店里的伙计大多数都要外出逛街，上馆子，喝酒，看戏，赌博等等。但是我外公一天下来尽管筋疲力尽，他还坚持在暗淡的灯光下练习写字，学打算盘，困了就拿冷水泼泼脸。我妈讲到这里，眼睛都红了。

功夫不负有心人，外公不仅在文化上都有长进，还学会了记账法，深得老板的信任，后来老板在苏州设分店，就派外公去分店当经理，于是他就独挡一面，揣摩经营之道，勤奋经营，开展商务活动，显露出他惊人的经商才能，为以后的东渡日本打下了结实的基础。

店員見習いになる

古い社会で、店員見習いになるということは、相当耐え難いことで、どのような辛い仕事も汚れ仕事もすべて、本当に、牛馬のようにしなければならず、店主の目に障ると罵しられ、殴られました。数日、このような辛い目、いじめに耐えられないと、すぐ、追い出されたでしょう。

祖父は農村で、あらゆる苦難、人生の虐待を経験していましたので、上海城隍廟の萃豊香燭店（線香とろうそくの店）の店員見習いになっても、さぼらず、朝早くから夜遅くまで働くことをずっと守り通しました。この店には十数人の店員がいて、祖父の仕事は炊事係で、市場へ行って野菜を買い、炊事場でご飯を炊き、どれも精通し、まめにてきぱき働き、帳簿はきちんとしていましたので、すぐに、店主に認められ、一年後に正式の店員になりました。しかし、祖父は、それで満足したわけではなく、心穏やかに、会計係の人に弟子入りし、時間があればその人に教えを請い、努力して基礎知識を学習しました。上海の街は繁華な地区で、夜になると、享楽的で喧噪な世界となり、店の大部分の店員は、街に出てぶらつきたがり、飲食店で食事をし、酒を飲み、劇を見て、博打などをしました。しかし、祖父は、一日中働き、どんなに疲れていても、がんばって、暗い照明の下で字を書く練習をし、そろばんのはじき方を学び、眠くなると、冷たい水を顔にぶっかけました。私の母は、ここまで話すと、目を真っ赤にしました。

努力は人を裏切りません。祖父は、基礎知識だけでなく、すべての面で進歩し、帳簿付けもできるようになり、店主の深い信任を得、のち、店主が蘇州に支店を設けるとき、祖父を支店の支配人に任命しました。それで、単独で仕事を担当し、経営の道をかみしめ、精を出して経営に励み、商売を発展させ、目覚ましい商才を発揮し、のちに日本へ渡る確固たる基礎を打ち立てました。

※原文中、「上海城隍廟萃丰香烛店」の箇所、店の位置について「虹廟前」となっている著書・論文もあります。

現在の上海城隍廟にある
線香ローソク店

大人物小故事（6）

我的外公吴锦堂 曹愛徳著

ここでは、「裹脚（纏足）」を載せました。お楽しみください。（編集委員 橘雄三）

裹脚

裹脚，对现代人感觉是很陌生的，而且是不可思议的，但旧社会富贵人家的女孩都要裹脚。我外婆是小脚，我妈当然也不例外。我妈不到十岁的时候，我外婆趁我外公出差，不在日本，外婆就请人帮我妈妈裹脚，用布左一层，右一层包起来，再用线扎成三角型，有点像裹粽子一样的，要勒得很紧。大约几个月以后，才能下地行走，当然是很痛很痛的，痛得眼泪要出来了，还是要忍住。我妈的个性比较任性的，还有点叛逆。到了深夜，痛得钻心，简直不能入睡，我妈就大胆地毅然决定自己把它拆掉。但是第二天外婆知道了，一顿痛骂，还是要再裹，这样的过程要反复几次，但是我妈妈实在受不了，每天拼命地叫喊，哭闹着不要活了。啊！正巧外公出差回来了，我外公对旧社会这样残酷的制度本身就很反感。因为裹脚是枷在女人身上的一把锁，太无人性了，又看到自己心爱的女儿这样受罪，实在是舍不得，就再三与我外婆商量，这样总算饶了我妈妈受这样的大罪。后来我妈妈的脚就成了半小脚，脚趾倾斜度很厉害，所以鞋子特难买，基本上不能穿皮鞋，结婚的时候就用棉花塞在鞋里，也只能穿很短的时间，所以我妈妈恨透了旧社会。旧社会对女人更残酷，因此我妈妈一辈子感激外公，外公成了我妈妈一生中最深爱最敬重的人了。

纏　足

纏足は現代人にはあまり知られていないと思うし、それに、不可思議なことです。しかし、古い社会の富貴な家柄の女子は、みんな纏足をしなければなりませんでした。私の祖母は纏足だし、私の母も、当然、例外ではありません。母がまだ十歳にならない時、祖母は、祖父が出張で日本にいないときを利用し、人に手伝ってもらって母に纏足をしました。布で何重にもくるんで、更に、糸で、三角形に縛りました。それは、無理にきつく、ぎゅっと縛られた粽（ちまき）のようでした。およそ、数か月後、やっと、歩けるようになるのですが、当然、痛くて痛くて涙が出そうになるのを耐え忍ばなければなりません。私の母はわがままで、少々、反抗的でした。深夜になって、痛みが骨身にしみ、眠れないので、母は大胆にも、ためらうことなく、自分でそれをほどこうと決めました。ただし、翌日、祖母が知り、ひどく怒鳴りつけ、また、もう一度、母の足に布を巻きました。このようなことが何度か繰り返されましたが、母は本当に耐えられず、毎日、懸命に、死にたいと泣き叫びました。あぁ！ちょうど折よく、祖父が出張から帰って来ました。祖父は古い社会のこのような残酷な制度に対し、自身、反感を持っていました。纏足は女性の身にとって鎖の足枷（かせ）で、はなはだ人間性が無く、自分の愛する娘がこのような苦しみを受けるのを見て忍びず、再三、祖母と相談し、やっとのことで、母がこのような大きな苦しみを受けるのを勘弁しました。その後、母の足は半纏足になり、足の指はひどく曲がって、（足に合った）靴は、なかなか買えず、おおよそ、革靴は履けず、結婚のとき靴に綿花を詰めて、やっと、短時間、履くことができました。それで、母は古い社会を骨の髄まで憎んでいました。古い社会は女性に対し、いっそう残酷で、それ故、母は一生、祖父に感謝し、祖父は、母の一生で最も深く愛し、最も尊敬する人となりました。